

地域漁業学会

会 報

【発行】

地域漁業学会 事務局

〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20

鹿児島大学水産学部内

chiikioffice@gmail.com

Tel&Fax 099-286-4280

<http://jrfs.org/>

No.88

2012年2月

目 次

1. 会長就任のご挨拶：地域漁業学会のさらなる飛躍を目指して・・・・・・・・・・若林 良和
2. 第53回大会印象記
 - 1) 地域漁業学会第53回大会に出席して・・・・・・・・・・小川真和子
 - 2) 離島にこそ未来を創造する力あり・・・・・・・・・・鈴木 隆史
 - 3) 第53回大会に参加して・・・・・・・・・・大串 伸吾
2. 第53回総会報告・・・・・・・・・・学会事務局
 - 1) 52期決算報告
 - 2) 53期予算計画
 - 3) 新理事および委員会構成
 - 4) 学会賞受賞者
 - 5) 次期大会の開催地等について
 - 6) 倫理規定の策定について
 - 7) 会則等の改正について
3. 事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・学会事務局
 - 1) 学会誌投稿規程の改正について
 - 2) 学会メーリングリストの変更について
 - 3) 住所変更等の連絡について

1. 会長就任のご挨拶

—地域漁業学会の更なる飛躍を目指して—

若林良和（愛媛大学）

地域漁業学会第 53 回鹿児島大会の新理事会、総会において、会長に選出されました愛媛大学の若林です。会長就任にあたり、ご挨拶と所信を述べさせていただきます。前任の山尾会長をはじめ歴代会長が築かれてきた成果を踏まえ、会員相互の活動の輪を広げて地域漁業の羅針を探ることで、本学会の更なる飛躍につながるよう努力していく所存です。会員、理事の皆様、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

学会の設立・改組改称の歴史を踏まえて

ご承知のとおり、1959年に西日本漁業経済学会として設立された本学会は、1995年に現在のよう
に改組・改称されて今日に至っており、まさに、地域漁業に関わる人文・社会科学研究の拠点といえ
ます。半世紀以上の歴史を有し、また、改称して15年余りを経た現在、今一度、本学会の設立、改
組・改称という原点に立ち戻って、諸活動を見直して推進する必要があると思います。

地域性と国際性を基本に置き、学際的に地域漁業研究を展開するという本学会の大原則を堅持して
伸張させるとともに、本学会の研究成果が、学術的な貢献はもちろん、地域貢献にもつなげることを
意識したいと思います。経済学、経営学、地理学、歴史学、社会学、文化人類学、民俗学、政策科学
など多面的な視点から、地域漁業に関する提言を試みるなど、漁業・漁村社会に少しでも役立つよう
に心がけたいと考えます。

そして、本学会には、研究者だけでなく、多種多様なバックグラウンドをもたれた方々が参加されて
います。分野の違う研究者はもとより、行政担当者や業界関係者の皆様が集い、地域漁業に関して、
様々な「垣根」を越えてトータルな議論ができるところに、本学会の大きな特色があります。この特
色を最大限に活かした取り組みが肝要だと思います。

様々な分野・立場におられる会員、理事の皆様から、忌憚のないご意見、建設的なご提案などをい
ただき、多様な取り組みを展開したいと存じます。

震災に関わる対応：被災地復興に対する研究企画

本学会は、2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに伴う原発事故に対して、3月18日に
緊急声明を発表し、さらに、本学会など水産に関する社会科学系の3学会で被災者支援に係る募金活
動を展開しました。その後、4月18日に15項目にわたる緊急提言「東日本大震災からの復興を目指
して」を行い、山尾前会長らを中心に、日本学術会議食料科学委員会水産学分会の東日本大震災に
関する提言にも寄与しました。

そうした経緯を踏まえて、本学会として、東日本大震災の復旧・復興に向けた特別委員会の設置を
第53回大会の理事会・総会において承認いただきました。被災地域の水産関係者や関連施設が早期
に復興され、水産業・漁村社会が健全に再生されるための具体的な方策について、本学会の特色を活
かしながら多面的な観点で、可能な局面から慎重に、かつ、丁寧に調査研究をする必要があると考え
ます。本学会としては、この特別委員会を中心に、共同で募金活動を展開した他の2学会と連携しな
がら進めていきたいと思ひます。

国際交流に関わる対応：日韓中の3か国の学術交流

本学会と韓国水産経営学会の共同で、2011年9月に韓国・統営市で日韓水産交流セミナーが実施さ
れました。本学会の日韓学術交流は、2004年の長崎県対馬以来のもので、今回は日韓双方で総勢50
人あまりが参加し、研究発表や討論、エクスカージョンなどが活発に行なわれて成功裏に終えました。
これは、韓国水産経営学会、本学会の韓国部会と日韓交流特別委員会の皆様のご尽力の賜物であり、
本学会の柱の一つである国際性を具現化した企画となりました。

今回、国際学術交流の必然性と重要性を改めて痛感いたしました。セミナーの最後に、韓国サイ
ド（韓国水産経営学会、本学会韓国部会）から、中国を含めた日韓中の3か国による学術交流の開催
という提案がありました。この企画は韓国サイドで主導される予定ですが、本学会としては、引き続
き、韓国との交流を進めるなかで、具体的な提案に主体的な対応をしたいと考えています。会員の皆
様には、韓国や中国の水産事情に関する研究を深めていただき、東アジアにおける水産物の市場・流
通、漁村の地理・文化を視野にいれた企画の実現に向けてご協力いただければ、幸甚です。

学会諸活動の更なる止揚

上述の2つはトピック的な課題であり、本学会の本来的な使命である諸活動についても、これまでの実績を踏まえた止揚を目指したいと思えます。昨今、持続的な資源利用、漁業構造改革、水産物フードシステム、多面的機能と生態系保全、条件不利地域対策、漁村振興、魚食文化、漁村社会、女性の役割、国際水産開発など地域漁業をめぐる議論は極めて多様です。これらの諸課題に対して、多面的な視点から検討できる本学会への期待は大きいと思われ、様々な機会を通して議論していきたいと考えます。

まず、年1回開催の大会ですが、来年度（第54回大会）は河原理事のご厚意で京都（立命館大学）での開催が決まっております。大会では、会員の皆様の日ごろの調査研究活動の成果を果敢に公表していただきますように、今からお願い申し上げます。すでに研究企画委員会が立ち上がっており、近畿部会を中心に、シンポジウムなど地道で斬新な企画・運営を検討していただいております。

次に、学会誌編集に関しては、これも会員の皆様の積極的な投稿をお願いいたします。たとえば、今回の鹿児島大会では、23もの個別報告がありましたので、是非、これらを論文として仕上げてくださいたいと思えます。編集作業を含めて学会事務局・編集委員会には多大な負担をかけておりますので、投稿規定の遵守、査読の迅速化など、会員の皆様には、更なるご協力をお願い申し上げます。

それから、会員相互の日常的な交流・議論の場づくりの拡充も進めたいと思えます。新鮮な情報と会員のホットな活動をお届けできるように、ホームページや「会報」の充実を図るとともに、学会としての研究会開催や部会活動も試みたいと考えます。

以上、思いつくままに申し上げましたが、本学会の活動の輪を着実に広げていき、更なる飛躍を目指したいと思えます。皆様のご支援・ご協力をいただきますように、衷心よりお願い申し上げます。

2. 第53回大会印象記

1) 地域漁業学会第53回大会に出席して

水産大学校 小川真和子

今年3月に開通したばかりの九州新幹線に乗って鹿児島中央駅までやってきた私を迎えたのは、桜島が吐き出す大量の火山灰であった。街のあちこちを黒く染める火山灰に驚きながら、私の地域漁業学会における2日間が幕を開けた。

初日に行われたシンポジウムでは「離島漁業の存立基盤の現状と課題」というテーマについて、5名の研究報告があり、次いでコメンテーター並びにフロアからのコメントや質疑応答がなされた。この日はとても11月と思えぬほど気温が高かったため、開けっ放しになった窓から、風と共に火山灰が容赦なく会場に入り込んできたのであるが、それが気にならなくなるほど白熱した議論が繰り広げられた。そして、離島と一口に言っても、それを取り巻く状況は実に多種多様であること、人口の減少や漁業の衰退など多くの問題を抱えつつ、他方では離島が豊かな水産資源を持ち、固有の文化を育んできた誇るべき歴史がある点など、様々なことを私は学んだ。離島漁業における様々な課題を、どう乗り越えれば良いのか、会場にいた他の参加者と共に考えているうちに、ふと私が思ったのは、そういえば私の研究テーマにしているハワイも、離島だということである。

日本の離島の現状と、100年前のハワイを同列に論じるのは乱暴であるが、太平洋のほぼ真ん中に位置していたが故に、西洋から「発見」されるのが最も遅かったというハワイは、欧米諸国中枢から見て、とんでもなく遠い島であっただろう。しかし、19世紀中頃になると、遠路はるばるアメリカやイギリスから多くの捕鯨船がハワイの海に結集し、またそれから約半世紀もすると、今度は太平洋の西の端に位置する日本の和歌山県や広島県、山口県などからやってきた日本人が操る漁船がハワイで大活躍し始め、現地における近代的な漁業を確立させていく。離島の漁業であるが故の悩みというもの、もし100年前のハワイが抱えていたとすれば、人々はどのように解決をはかったのだろうか、などなど、日本の離島の話しを聞きながらつい、私の脳裏ではハワイの島々が交錯し始めたのであった。

鹿児島県は海と縁が深い。桜島を抱える錦江湾だけではなく、実に600キロに渡って大小様々な島が連なり、それらを取り巻く海と共に人々は生きてきた。そのような海の香り高い鹿児島の地にいれば、漁業を語る口調に熱を帯びるのは当たり前であろう。大会二日目は、二つの会場で個別報告が行われたが、いずれの報告もテーマが実に多彩かつ示唆に富み、会場との質疑応答も、非常に建設的な雰囲気で行われていたのが印象的であった。

たった2日間の大会であったが、私にとっては、もっと長い時間を鹿児島で過ごしたような気分がする。それはきっと心地よかったからであろう。最後になりますが、そのような素敵な空間を用意してくれた鹿児島大学水産学部を始めとする関係者の皆様に感謝の意を表します。

2) 離島にこそ未来を創造する力あり

桃山学院大学 鈴木 隆史

今回10年ぶりに地域漁業学会に参加した。30年以上学会に在籍していたものの、学会誌に投稿したのは数回にしか過ぎず、数年前には自然退会の形になっていた。にもかかわらず、再入会を快く承認していただき、個人発表をする機会を与えていただいたことに感謝したい。

かつて鹿児島大学大学院（修士課程）で2年間学んだ私にとって、今回の開催地が鹿児島だったのは感慨深い。これまでインドネシアなど海外での調査研究に従事していたものの、学問的世界からは遠ざかっていた。その間、当時大学院で共に学んだ学友や後輩たちが着実に業績を蓄積し、研究者として成長していくのを見て、遠くから羨ましく思っていたのだが、今回久しぶりに学会に参加して非常に新鮮だったのは、研究者の世代交代が進んでいることだった。大学院生を含む若い世代が溢れていたことには正直言って驚いた。

残念ながら私自身、個人発表の準備のために直前までホテルで発表用の原稿を手直ししていたこともあり、シンポジウムは午前中、個人発表は一部しか参加できなかったが、開催場所が鹿児島ということからシンポジウムのテーマが離島漁業にあてられていたことは印象深かった。

これまでインドネシアの漁村や辺境の小さな島々を歩いてきたが、インドネシアには無数の離島が存在する。これらの島々同士は一方で中央や地方の大都市と結びつきを持ちながら、近隣の島々間に独自のネットワークを築いている。ヒトやモノはこれらの毛細血管のように張り巡らされた島々間のネットワークを通じて移動する。そこには中央だけに依存しない、リスクをお互いに分散し合う相互依存関係が成立しているように思う。

今回のシンポジウムでも日本各地の離島漁業や住民の生活が直面する問題の深刻さが際立ったが、一部の島々では若者のIターンなども認められるという。山口県の報告のなかにあった「若者が若者を呼ぶ」というコメントの持つ意味は深い。離島が抱える不便さを楽しみ、新たな創造や住む人びとと土の絆の深める起爆剤と考える人びとも着実に生まれつつある。しかも、3.11以降、生活の価値観そのものが大きく変化を遂げつつある。私自身、原発建設問題で揺れる山口県上関町の祝島を訪れた際、島の人びとが「この豊かな海と山があったら生きていける」と語った。その言葉は、伝統的な資源管理制度「サシ」を守り続ける小さな島の村で聞いた言葉、「サシがあるから私たちは生きてゆける」と重なり合った。生きる力が問われる中、島の豊かな環境と周辺に豊かな海がある限り、これからは人が人を呼び新たな地域とネットワークを創造していけると感じた。

3) 第53回大会に参加して

北海道大学大学院農学院 大串伸吾

このたび地域漁業学会の会員になり迎えた第53回学会は、私にとって少しの成長を感じた学会旅行になりました。「離島漁業の存立基盤と課題」をテーマにしたシンポジウムでは、条件不利克服が地域政策レベルで重要な課題であることを改めて認識しました。そして一般化した話にすれば「存立基盤」という点について、これは離島と言う物理的な問題に限らない点もあることが改めて印象に残りました。「陸の孤島」と言われるような条件不利地域も存在するわけです。若者の定着についても同様の課題が議論されている…そんな問題が先鋭化し、将来本土でもより問題が浮き彫りになる未来像としての離島に今後も注目して知識を集めたいと思います。

2日目の個別報告は大学院生になって3回目の口頭発表であり、他の方の報告にも意識を向ける余裕を持てるようになりました。中でも印象に残ったのが牧野光琢さんの知床水産業を事例とした気候変動への適応についての報告で、社会科学と自然科学の共同研究という学際的な視点の分析の必要性に共感を覚えました。

懇親会では、久しぶりに課程博士に身を置く人と出会ったことも一つの出来事でした。私は修士課程を東京海洋大学で修了し、博士課程を北海道大学農学院の水産経営経済学研究室に進学しているため、農業経済学分野の課程博士の友人が多くいます。漁業経済分野の課程博士は非常に少ないのが残念ですが、離島における若年就業者のように、それぞれの研究が真摯に議論された上で自己実現できる環境があることを祈り、今後ともよろしく願いいたします。

3. 第53回総会報告

1) 第52期決算報告

(1) 収入の部

費目	予算額	決算額	増減(決算-予算)
前期繰越金	2,069,420	2,069,420	0
会費収入	1,900,000	1,592,000	(308,000)
一般会費	1,500,000	1,380,000	(120,000)
学生会費	200,000	192,000	(8,000)
団体会費	200,000	20,000	(180,000)
大会参加費	100,000	79,000	(21,000)
抜刷自己負担金	0	7,500	7,500
学会誌販売収入	120,000	416,436	296,436
投稿料収入	300,000	210,000	(90,000)
寄付金	0	100,000	100,000
雑収入	1,000	114	(886)
合計	4,490,420	4,474,470	(15,950)

(寄付金は近藤信義会員からのものである。)

(3) 財産目録

種別	残高
銀行預金	559,768
郵便振替	2,478,826
現金	34,927
計	3,073,521

(2) 支出の部

費目	予算額	決算額	増減(決算-予算)
本部事務費	160,000	161,652	1,652
通信・郵送費	130,000	92,878	(37,122)
労賃・謝金	20,000	13,000	(7,000)
消耗品費	10,000	55,774	45,774
学会誌作成費	2,520,000	952,140	(1,567,860)
印刷費	2,500,000	952,140	(1,547,860)
労賃・謝金	20,000	0	(20,000)
消耗品費	0	0	0
名簿・会報作成費	0	5,675	5,675
理事会運営費	0	0	0
部会費(10000*7部会)	0	0	0
委員会費(10000*5委員会)	0	0	0
学会賞副賞費	100,000	0	(100,000)
大会準備費	400,000	189,040	(210,960)
(内要旨集印刷費)	200,000	88,200	(111,800)
学術会議等団体活動費	0	0	0
予備費	0	92,442	92,442
小計	3,180,000	1,400,949	(1,779,051)
次期繰越金	1,310,420	3,073,521	1,763,101
合計	4,694,676	4,474,470	(220,206)

(学会誌1号分印刷費、大会準備金支払い・要旨印刷代金支払いは次期に繰り越し)

2) 第53期予算計画

(1) 収入の部

費目	53期予算額	52期予算額	増減(53期-52期)
前期繰越金	3,073,521	2,069,420	1,004,101
会費収入	1,850,000	1,900,000	(50,000)
一般会費	1,500,000	1,500,000	0
学生会費	200,000	200,000	0
団体会費	150,000	200,000	(50,000)
大会参加費	100,000	100,000	0
抜刷自己負担金	100,000	0	100,000
学会誌販売収入	300,000	120,000	180,000
投稿料収入	200,000	300,000	(100,000)
寄付金	0	0	0
雑収入	1,000	1,000	0
合計	5,624,521	4,490,420	1,134,101

(2) 支出の部

費目	53期予算額	52期予算額	増減(52期-51期)
本部事務費	190,000	160,000	30,000
通信・郵送費	130,000	130,000	0
労賃・謝金	50,000	20,000	30,000
消耗品費	10,000	10,000	0
学会誌作成費	2,020,000	2,520,000	(500,000)
印刷費	2,000,000	2,500,000	(500,000)
労賃・謝金	20,000	20,000	0
消耗品費	0	0	0
名簿・会報作成費	0	0	0
理事会運営費	0	0	0
部会費(10,000*8部会)	0	0	0
委員会費(10,000*7委員会)	0	0	0
学会賞副賞費	100,000	100,000	0
大会準備費	400,000	400,000	0
(内要旨集印刷費)	200,000	200,000	0
予備費	0	0	0
小計	2,710,000	3,180,000	(470,000)
次期繰越金	2,914,521	1,310,420	1,604,101
合計	5,624,521	4,490,420	1,134,101

3) 学会賞受賞者

2011年の地域漁業学会(鹿児島大会)において、以下のとおり、地域漁業学会賞および中楯賞の受賞が決まりました。なお、柿本賞は該当がありませんでした。

<地域漁業学会賞>

片岡 千賀之 会員

「地域漁業の近現代史の研究」

学会賞、ありがとうございました。

今後も、各地域漁業の盛衰を長期的スパンで取りまとめていきたいと思っております。近年の漁業は衰退縮小していることが多く、憂鬱になりますが、再生の手がかりは歴史のなかにあるという気持ちで臨みたいと思っております。

中村 周作 会員（宮崎大学）

「行商研究」

学会賞、心よりお礼申し上げます。本書は、かつて漁村の基幹産業であった女性水産物行商の総括的研究を目的に書いたものです。ご指導いただいた大島襄二先生始め多くの先生方に深謝申し上げます。今は、酒と魚料理の文化地理と、またまた漁業の端っこの研究に精進しております。今後とも、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

<地域漁業学会奨励賞（中楯賞）>

久賀 みず保 会員（鹿児島大学）

「水産物の商品化技術に関する研究」

養殖マダイ流通、カツオ節加工流通を材料にした論文をもとに、この度の評価を頂きました。これらの研究を通じて学んだことは、水産業も他産業同様、多様なマーケットを睨みながら柔軟に商品化を図ることが重要だという点です。そしてそれを実現するひとつが、流通局面における加工機能の添加あるいは更なる高次加工化でありましょう。強まりつつある簡便化志向を背景に、加工機能はますます重要になっています。急速に変化する末端需要との結びつきを意識しながら水産加工業の現状を評価し展望すること、これを当面の研究課題とし水産物需給の正しい理解に貢献していきたいと考えております。同時に、この度の受賞を励みに執筆量を増やし、洞察力、筆力を錬磨していきたいと思ひます。ありがとうございました。

4) 新理事および委員会構成

(1) 新理事構成

会 長：若林 良和
副会長：伊藤 康宏

部 会 名	理 事
九州・沖縄 (5名) 推薦理事7名 合計12名	<ul style="list-style-type: none"> ・亀田 和彦 (長崎大学) ・佐々木 貴文 (鹿児島大学) ・島 秀典 (鹿児島大学) ・佐野 雅昭 (鹿児島大学) ・李 善愛 (宮崎公立大学) ・鹿熊信一郎 (沖縄県庁) ◎波積 真理 (熊本学園大学) ・佐久間美明 (鹿児島大学) ・鳥居 享司 (鹿児島大学) ・久賀みず保 (鹿児島大学) ・日高 健 (近畿大学) ・米田 寛 (みなと新聞)
中国・四国 (4名) 推薦理事3名 合計7名	<ul style="list-style-type: none"> ・若林 良和 (愛媛大学) ◎板倉 信明 (水産大学校) ・甫喜本 憲 (水産大学校) ・山尾 政博 (広島大学) ・竹ノ内徳人 (愛媛大学) ・濱田 英嗣 (下関市立大学) ・伊藤 康宏 (島根大学)
近 畿 (4名) 推薦理事1名 合計5名	<ul style="list-style-type: none"> ・前潟 光弘 (近畿大学) ・榎 彰徳 (大阪いずみ市民生活協同組合) ・津國 実 (近畿大学) ◎増崎 勝敏 (大阪府立旭高等学校) ・河原 典史 (立命館大学)
東海・北陸 (2名) 推薦理事3名 合計5名	<ul style="list-style-type: none"> ・加藤 辰夫 (福井県立大学) ・磯部 作 (日本福祉大学) ◎常 清秀 (三重大学) ・林 紀代美 (金沢大学) ・東村 玲子 (福井県立大学)
関 東 (7名) 推薦理事1名 合計8名	<ul style="list-style-type: none"> ◎玉置 泰司 (中央水産研究所) ・宮田 勉 (中央水産研究所) ・牧野 光琢 (中央水産研究所) ・田坂 行男 (中央水産研究所) ・橋村 修 (東京学芸大学) ・工藤 貴史 (東京海洋大学) ・末永 芳美 (東京海洋大学) ・山下 東子 (明海大学)
東北・北海道 (2名) 合計2名	<ul style="list-style-type: none"> ◎宮澤 晴彦 (北海道大学) ・古林 英一 (北海学園大学)
韓 国 (2名) 合計2名	<ul style="list-style-type: none"> ◎金 炳浩 (釜慶大学校) ・姜 練實 (麗水水産大学校)

会計監事：・三輪 千年 (水産大学校) ・田中 史朗 (鹿児島県立短期大学)
注：部会名の後の人数は、部会員数を反映した理事数。その下の推薦理事人数は
会長推薦枠の人数。合計は両者をあわせた部会理事の人数。◎は部会長を示す。

(2) 委員会構成

①学会誌編集委員会

- ・久賀みず保 (鹿児島大学)
- ・金 炳浩 (釜慶大学校)
- ◎佐野 雅昭 (鹿児島大学)
- ・佐々木 貴文 (鹿児島大学)
- ・田坂 行男 (中央水産研究所)
- ・鳥居 享司 (鹿児島大学)
- ・林 紀代美 (金沢大学)

②国際交流委員会

- ・玉置 泰司 (中央水産研究所)
- ・波積 真理 (熊本学園大学)
- ◎亀田 和彦 (長崎大学)
- ・牧野 光琢 (中央水産研究所)
- ・常 清秀 (三重大学)
- ・姜 鍊實 (全南大学校)
- ・東村 玲子 (福井県立大学)
- ・竹ノ内徳人 (愛媛大学)

③研究企画委員

- ◎河原 典史 (立命館大学)
- ・前潟 光弘 (近畿大学)
- ・李 善愛 (宮崎公立大学)
- ・佐久間美明 (鹿児島大学)
- ・榎 彰徳 (大阪いずみ市民生活協同組合)
- ・田中 史朗 (鹿児島県立短期大学)
- ・塚本 礼仁 (滋賀県立大学)
- ・林 紀代美 (金沢大学)

④学会賞選考委員会

- ◎片岡千賀之#
- ・田和 正孝 (関西学院大学) #
- ・若林 良和 (愛媛大学) *
- ・濱田 英嗣 (下関市立大学) *
- ・三輪 千年 (水産大学校) #
- ・田坂 行男 (中央水産研究所) #
- ・山尾 政博 (広島大学) *

⑤震災対応特別委員会

- ◎山尾 政博 (広島大学)
- ・若林 良和 (愛媛大学)
- ・林 紀代美 (金沢大学)
- ・山下 東子 (明海大学)
- 磯部 作 (日本福祉大学)

注：学会賞選考委員会の*は2013年9月、#は2012年9月任期を示す。各委員会の◎印は委員長、○印は副委員長を表す。研究企画委員の任期は1年とする。震災対応特別委員会のメンバーは暫定的なものであり、今後増える可能性がある。

5) 次期大会の開催地等について

次期第54回大会は、近畿部会のお世話により、立命館大学で開催されることになりました。

日程と会場は以下のとおりです。

- 日程 10月26日(金)：各種委員会、理事会
- 27日(土)：一般報告、総会、ミニシンポ、懇親会
- 28日(日)：シンポジウム
- 会場 立命館大学衣笠キャンパス

6) 倫理規定の制定について

倫理規定が理事会及び総会で審議され、原案通り制定されましたので、お知らせいたします。

地域漁業学会倫理規定

地域漁業学会では、日本学術会議の「科学者の行動規範」などを遵守するとともに、科学者として社会的に有用な研究を行うため、ここに倫理規定を定める。

第1条 (社会的責任) 会員は、社会における役割の重要性を認識し、自らの専門知識を活かして、地域漁業の課題や社会の負託に相応しい研究活動を行い、社会の発展に寄与する。

第2条 (科学者としての行動) 会員は、科学の自律性が社会からの信頼と負託の上に成り立つことを自覚し、科学的真実に基づいて行動する。

第3条 (自己の研鑽) 会員は、地域漁業の分野における自らの専門知識と能力の向上に努める。

第4条 (情報の公開) 会員は、研究の遂行を通して得られた成果を積極的に公開し、社会に還元する。

第5条（法令等の遵守） 会員は、法令等を遵守し、社会的規範に背くことなく、良心に従って研究し、行動する。

第6条（研究環境の整備） 会員は、責任ある研究と不正行為を防止する公正な研究環境の確立・維持のため、研究環境の質的向上に積極的に取り組む。

第7条（知的財産権の保護） 会員は、自らの知的財産権の保護・利用を図り、また、他者の研究成果を尊重し、他者の著作権などの知的財産権を保護する。著作権の侵害、論文の剽窃、盗用などは行わない。

第8条（他者の尊重） 会員は、他者を尊重し、他者の意見、主張、批判などを謙虚に受けとめるとともに、他者の批評は適切に行う。

第9条（個人情報等の保護） 会員は、調査研究などで入手した個人情報などの保護に努める。

第10条（公平性の確保） 会員は、基本的人権を尊重し、人種、国籍、性別、年齢、思想信条、宗教、障害の有無などに拘わらず、公平に対応する。

付則 本倫理規定は、平成23年11月7日より施行する。

7) 会則等の改正について

地域漁業学会会則及び委員選出規程の改正が理事会および総会で審議され、原案通り了承されました。研究企画委員会の役割を近年の現状にあわせて変更したほか、各種委員会の委員数を柔軟に変更できるようにしました。旧会則および委員選出規程にアンダーラインを加え、二本線を削除したものが改正後の規則になります。規則全体は学会のウェブサイトでご確認ください。

地域漁業学会会則第14条

（委員会）

第14条 本会は、次の委員会を置く。委員長は理事が務め、委員の選出は別に定める選出規程によって行い理事会に報告する。なお委員の任期は役員に準じ、再任を妨げない。但し、研究企画委員の任期は一年とする。

1. 学会賞選考委員会

本委員会は年1回学会賞選考に当たる。

2. 学会誌編集委員会

本委員会は会誌の編集・刊行等に当たる。

3. 研究企画委員会

~~本委員会は特別出版・共同研究企画・視察調査企画等に当たる。~~

本委員会は大会シンポジウムの企画等に当たる。

4. 国際交流委員会

本委員会は諸外国の関係学会との交流等に当たる。

地域漁業学会 委員選出規程（内規）

1. 学会賞選考委員・学会誌編集委員は専門分野を考慮し、特定の専門分野に片寄らない選出を行う。
2. 研究企画委員・組織委員は部会や専門分野を考慮し、連携を重視して選出を行う。
3. 委員長の選出は、本会則第14条に従うものとする。
4. 各委員会の委員数は原則として以下のとおりとするが、必要に応じて増やすことが出来る。

・学会賞選考委員会	7名	・学会誌編集委員会	6名
・研究企画委員会	6名	・国際交流委員会	6名

3. 事務局からのお知らせ

1) 学会誌投稿規程の改正について

地域漁業学会の学会誌「地域漁業研究」の投稿規程3条を、理事会及び総会での議論を踏まえ、下記の通り改正いたします。研究分野によって投稿論文のスタイルには大きな幅があることを考慮し、より柔軟に投稿できるようにいたしました。なお、最新の投稿規程全体は学会のwebサイトをご覧ください。

(旧)

3. 原稿の形式

原稿の枚数は、400字詰め横書き原稿用紙換算で論文・実態調査は40～50枚、研究ノートは30～40枚、書評10～15枚、その他は30～40枚程度とする。ただし図表は含めない。また図表数は6葉以内とする。原稿の書き方については、別に定める執筆要領に従う。

(新)

3. 原稿の形式

原稿の文字数は、論文・実態調査は16,000～24,000字、研究ノートは12,000～16,000字、書評4,000～6,000字、その他は12,000～16,000字程度とする。文字数には注、付記、参考文献等を含む。ただし図表は含めない。また図表数は10葉以内とする。原稿の書き方については、別に定める執筆要領に従う。

2) 学会メーリングリストの変更について

学会メーリングリストが変更になりました。新たなメーリングリストは、学会webサイトより自動で入会可能です。<http://jrfs.org/>にアクセスして左下の「事務局より」を選び、「会員のメーリングリスト運用について」からのリンクをクリックして画面の指示に従ってください。なお、従来のメーリングリストに加入した方は現メーリングリストにも参加いただいています。

3) 住所変更等の連絡について

住所や連絡先を変更した会員はお早めに事務局までメール、ファックス、郵便等でお知らせください。特に春は転勤や卒業・修了がきっかけで連絡が取れない会員が増加する傾向にあります。学生会員の指導教員の方も、お手数ですがご指導をお願いいたします。

地域漁業学会 <http://jrfs.org/>

本部事務局 〒890-0056 鹿児島市下荒田4-50-20

鹿児島大学水産学部内 Tel&Fax 099-286-4280

担当 佐久間美明 chiikioffice@gmail.com

郵便振替：01750-0-83886 銀行振込：鹿児島銀行 きしゃば支店 普通 834624